

興味・関心を持って楽しく学ぶ児童の育成

－社会科学学習における「つかむ」段階の指導を通して－

与那原町立与那原小学校教諭 與那嶺 正 子

内容要約

興味・関心を持って楽しく学ぶ児童の育成をめざして、児童が問題を持ち意欲的に取り組む社会科学の学習に取り組んだ。

問題解決的な学習において、「つかむ」段階で資料やゲストティーチャーを活用し、児童一人一人の問題を持たせ、学習過程の中に体験的な活動を取り入れることで児童は興味・関心を持って楽しく学ぶことができた。

【キーワード】 興味・関心を持って楽しく学ぶ 「つかむ」段階 一人一人の問題 体験的な活動
問題解決的な学習 地域素材の教材化

目 次

I テーマ設定の理由	31
II 研究仮説	31
III 研究内容	
1 興味・関心を持って楽しく学ぶとは	32
2 問題解決的な学習	33
3 「つかむ」段階の指導	33
4 地域素材の教材化	34
IV 授業実践	
1 単元名	35
2 単元設定の理由	35
3 単元の指導目標	35
4 評価の目標	35
5 単元の指導計画	35
6 本時の指導計画	37
7 授業の考察	38
V 研究全体の考察	39
VI 研究の成果と今後の課題	40

＜小学校 社会＞

興味・関心を持って楽しく学ぶ児童の育成

－社会科学学習における「つかむ」段階の指導を通して－

与那原町立与那原小学校教諭 與那嶺 正 子

I テーマ設定の理由

新学習指導要領は、小学校社会科授業に期待するものとして、「各学校で地域の実態を生かすと共に、児童が地域社会や我が国の産業、国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、興味・関心を持って楽しく学習に取り組めるようにすること」を重視して改訂された。

これをうけて、これからの社会科では、各学校が地域の実態を生かし、地域に密着した学習を一層弾力的に展開し、社会の出来事や事柄、地名や年号などの細かな知識を覚える授業から、児童一人一人が観察・実験・体験・表現など具体的な活動を通して、社会的事象の意味や働きなどを考えたり、自分の意見を述べたりする授業への改善が求められている。

さいわい3年の社会科は、すべてが地域学習である。1学期は、自分たちの住んでいる町の地形や、土地の利用、公共施設（コミュニティーセンター）等の様子を探検し、調べ学習や体験学習をしてきた。児童は生活科で地域探検を体験しており、活動的な3年生にとって外へ出て活動する学習は大変楽しく大好きなものである。「先生、また、探検に行こう。」「探検が楽しい。」という声もよく聞かれた。しかし、今までの体験学習では活動そのものは楽しんで取り組んでいるように見えたが、何について調べているのか学習問題をしっかりつかんでいない児童がいたり、また、最後まで意欲的に取り組めない姿も見られた。このことは、問題を設定する際には教師主導になりがちであったり、興味・関心や学習の必要感を持たせていなかったこと、また、問題についての話し合い活動が十分なされていなかったためである。つまり、児童一人一人が何について聞くのか、何を見てくるのか問題をしっかり持っていなかったということに原因があった。

本校では地域の実態を生かして、『町の人たちの仕事とくらし』の単位において、生産に関わる仕事として「かわら工場」を取りあげている。「かわら工場」は与那原町においては、就業者数や生産額でも地域を代表する地場産業である。このことから、地域への理解を深め、自覚と誇りを育てるうえで大事な学習教材である。

そこで、児童一人一人が興味・関心を持って楽しく学ぶためには、問題意識を持たせ、意欲的に取り組ませることだと考え、特に、「つかむ」段階の指導において、工夫を試みることにした。興味・関心を喚起するような教材との出会いや、児童の驚きや疑問、好奇心をくすぐるような資料の提示、そしてゲストティーチャーを活用することで一人一人に問題を持たせることにした。特に名人の話による働く人への共感や、さらに「どうしてかな？」など、「かわら」への探究心をゆさぶることで興味・関心を持たせたい。また、問題解決的な学習を取り入れ、学習過程の中に体験的な活動や表現活動を取り入れる工夫や支援をすることによって意欲的に取り組み、問題解決に向かって楽しく学ぶであろうと考える。

以上のことから、今回、社会科学学習の「つかむ」段階を工夫すれば、社会科学学習が充実するであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

身近な地域の産業である「かわら工場」に目をむけさせ、問題解決的な学習において「つかむ」段階を工夫をすれば、児童一人一人が興味・関心を持って楽しく学ぶ社会科学学習ができるであろう。

Ⅲ 研究内容

1 興味・関心をもって楽しく学ぶとは

(1) 興味・関心をもって楽しく学ぶ児童像

興味・関心をもって楽しく学ぶとは、児童が問題を持って意欲的に取り組む姿である。意欲的に取り組むということは、児童にとって「楽しい学習」だからである。そこで、本研究を進めるにあたっては、児童にとって、特に3年生の求める「楽しい学習」とはどのようなものか、3年生の特徴から学習像を持つことが大切である。

中学年、特に3年生の児童の特徴は、考えてから行動するのではなく、考えることより体が先に動く年代なのである。楽しいことは徹底的に追及するが、その反面、面白くないことには見向きもしないと言われる。この時期の児童は、自分の考えや行動などに変な自信を持ち、それを主張してくる。自分で実際に見ないと納得しないため、よく調査したり、見学したり、珍しいものや面白いものがあると、どこまでも出かけたりする。つまり、「はてな(?)がたくさんでて、調べられる学習」を望んでいるということが言える。体当たりの活発な活動を好む時期であり、旺盛な行動力で体当たりして課題を解決しようとする年頃だけに、「体当たりして調べる学習」も大好きである。

本学級の子ども達の実態でも、見学やインタビュー、体験活動がすきであり、机上で行う学習は好まない。また、紙芝居作り、新聞作り、絵本作り、ペープサートなどの活動的な学習を好み、体験的に学習してきたコミュニティーセンター、スーパーの学習が楽しかったとの感想を述べている。

まとめてみると、3年生の求める「楽しい学習」とは、

- 意見が分かれて、ケンカ（言い合い）ができる学習
- はてな(?)がたくさん出て、調べられる学習
- 自分の力がせいっぱい出せる学習
- 紙芝居・パノラマ・新聞などを作る学習（書く学習）
- みんなで力を合わせて、むずかしい問題を解く学習
- 見学に行ったり、調べに行ったりする学習
- 工夫して物を作る学習
- 知らないことについて一生懸命考える学習

『社会科・楽しい授業の創造』より

と、言える。学年が変わっても、求められているものは同じだと言えるが、3年生の児童には「自ら問題を発見し、友だちと協力して、問題を解決していく学習」が、「楽しい学習」といえる。

(2) 楽しく学ぶ社会科の学習

児童の求める「自ら問題を発見し、友だちと協力して、問題を解決していく学習」とは、社会事象に対して興味・関心を持ち、自ら問題を発見し、問題が明確になったとき、意欲を持ち学習を展開していく意欲態度のことである。そのためには従来の一般的傾向である知識中心の授業や、児童が受身的な学習態度、教科書の内容をノートに写すだけの授業、教室の机に向かって取り組む静的な学習活動ではなく、問題解決的な学習に体験的な活動を入れることである。学習を楽しんでいる本質的な姿は、問題を解決していく楽しさ、知らなかったことが分かるようになる楽しさ、多少困難なことでもそれにチャレンジする楽しさである。このように学習問題を設定し、解決していく問題解決的な学習過程のなかに体を使って動的に取り組む調査、見学、表現、体験などの活動を取り入れた授業が楽しく学ぶ社会科の学習である。また、そのような活動をさせるためにも地域の素材を教材化したり、社会人を活用したりするなど、地域社会の場を「教室」とし、人や施設・設備とかかわりながら学ぶ体験的な活動を工夫することが大切である。以上、興味・関心をもって楽しく学ぶ社会科の学習について図のようにまとめた。

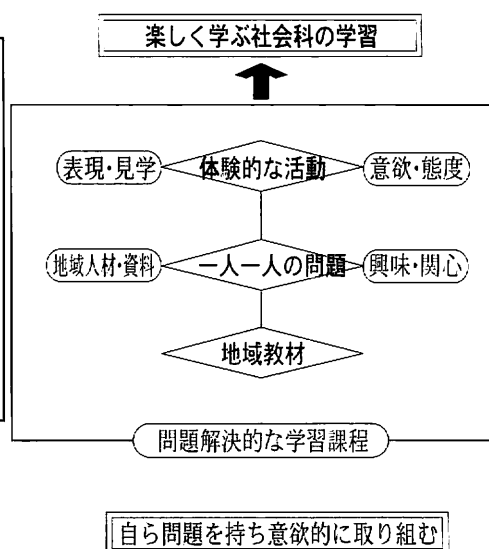


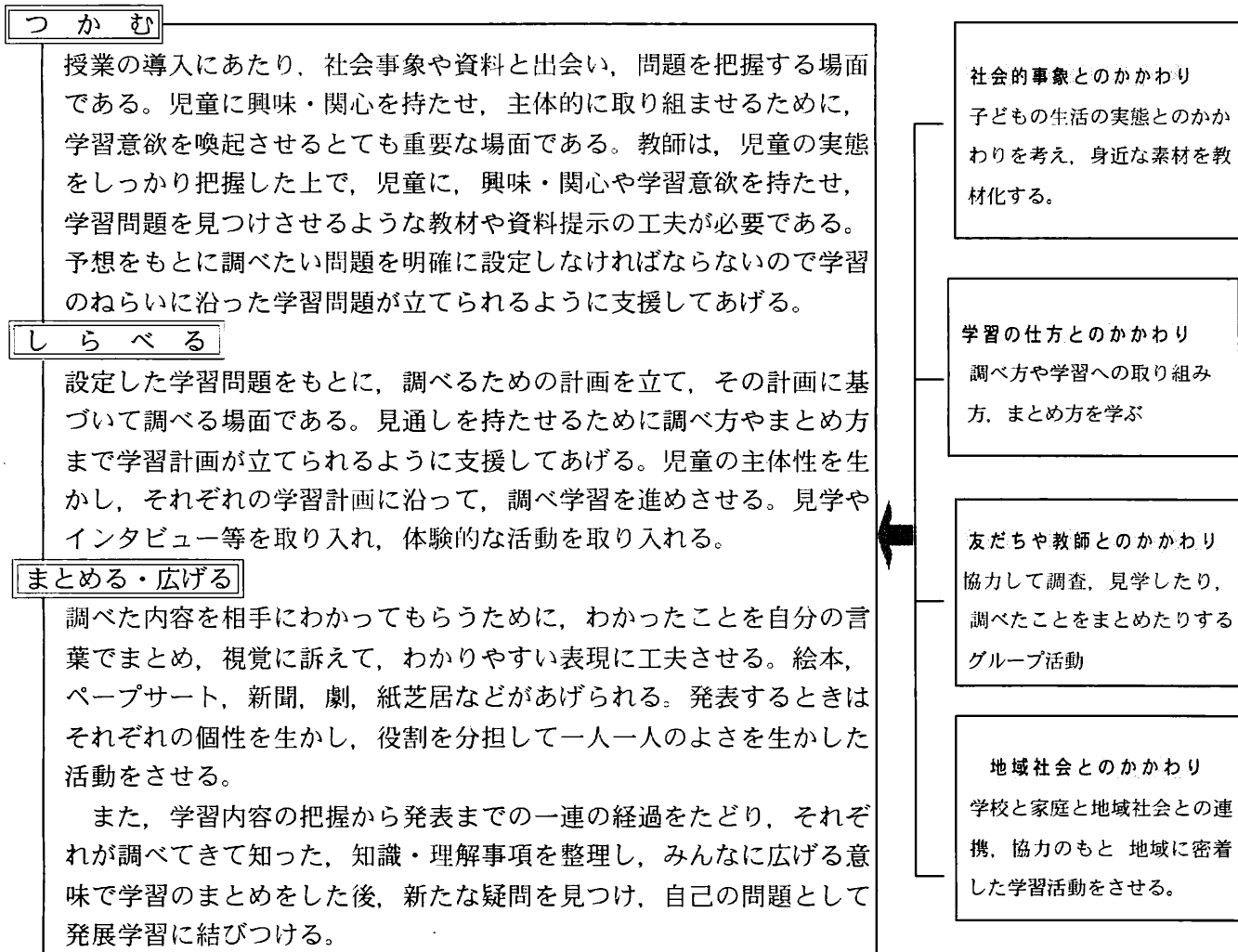
図 興味・関心を持って楽しく学ぶ社会科の学習

2 問題解決的な学習の学習過程と4つのかかわり

児童が求める「自ら問題を発見し、友だちと協力して、問題を解決していく学習」は、自ら学ぶ意欲と主体的な学習の仕方を身につけることでもある。その方法として問題解決的な学習がある。

問題解決的な学習は、学習活動を通して子どもが自らの学習問題を見つけ、学習計画を立て、調べ、まとめ、表現するという一連の流れがある。

また、社会科の学習は、本来さまざまな「かかわり」を大事にしながら学習を組み立ててきた教科であるので、下記の問題解決的な学習の学習過程の活動に4つのかかわりを持たせるように支援することにした。今回は、この過程〈つかむー調べるーまとめる・広げる〉の段階にまとめてみた。



このように、楽しい社会科の学習は、問題解決的な学習の学習過程の中で、児童が地域社会に出て、社会的事象や地域の人とのかかわりながら、友だちと共に学ぶことである。

3 「つかむ」段階の指導

(1) 資料提示

資料とは社会的事象に興味・関心を喚起させるための具体的な事物である。教師はその資料を提示することで学習への興味・関心を喚起させ、さらにこれまでの知識に関連づけることにより、イメージを持たせ、調べる学習へとつなげることができる。

資料には年鑑・事典類の文章資料、写真・新聞・ちらし・パンフレット・絵などの映像資料、グラフ・地図・統計などの図表資料、実物・標本などの現物資料、レコード・録音テープなどの音声資料、VTRなど視聴覚に訴える複合的資料がある。

資料にふさわしい内容として次の5つが考えられる。

- 児童の常識をひっくり返すもの
- 事物を確かに見せられるもの
- 思考の曖昧さをつくもの
- 児童の意表をつくもの
- 新鮮な出会いのあるもの

その資料の内容は事実を認識させたり、児童の思考をゆさぶり学習意欲を引き出し、追求してみたい学習問題をつかむためのものでなくてはならない。

資料は効果的に活用する必要がある。授業のどこで活用するかで資料の持つ意味やその位置付けも異なる。授業の前半で活用する資料は、驚きや揺さぶり・問題発見の資料となる。主に児童の興味・関心を高め、追求問題を見つけ出すため、視覚や聴覚に訴えることのできる映像・音声資料や、直観に訴えかけることのできる現物・図表資料が効果的である。中盤では、仮説を検証するための根拠となるデータを含む図表資料や、文章資料が効果的である。さらに後半では、学習を通して形成された自分なりの新しい社会的な見方・考え方を、より一層普遍的な知識へ深めていくための資料が望ましい。

資料提示の仕方としては、児童に興味・関心を喚起させるために、例えばブラックボックスを使用し、実物を関連提示したり、統計やグラフなどを比較提示したり、写真やパンフレット・新聞などはOHCなど視聴覚機器を利用して順次提示する方法がある。

また、1時間の中で活用する資料があまりにも多すぎると、資料の読み取りだけで時間が終わってしまい、資料に振りまわされた授業に陥ってしまう。そこで、資料はできるだけ少なめにして、どのようなことに気づかせ、何を考えさせるのかについて、あらかじめきめ細かな発問を組み立てておくことなども大切である。しかも、数字や統計グラフなどの、抽象的なものや解説的な文章に偏らないで人間の具体的な生活の営みが読みとれるような多様な資料の提示が教師側に望まれる。

このように、資料は豊富な事実に知識を具体的でわかりやすく提示することによって、社会的事象に対する興味・関心を引きつけ、学習へ意欲的に取り組む動機付けになる。

(2) 地域人材の活用

その地域には、さまざまな人たちが働き生活している。公共施設や機関を始め、工場や商店、農家などで働いている人、地域の歴史を研究している人、ボランティア活動に参加している人、趣味を生かした活動に取り組んでいる人。これらの地域の人々を学習に活用することである。これらの人々を学校へ招聘して話を聞いたり、その人を訪ねて仕事や活動の様子を見たりすることは、地域の人たちとのふれ合いのある学習活動を展開することであり、「地域に開かれた社会科の学習」にすることである。また、地域の人々を学習で活用することは、かかわりを持ち、直接的・間接的に話を聞くことができ、児童の心情をゆさぶり、共感をもって人間の生き方に迫ることになる。そのため、児童一人一人に、地域の成員として、地域を愛し大切にしていこうとする態度を養うことになる。活用のメリットとして、①児童にとって、身近な人々であることから、学習に親しみを感じ、一層意欲的に取り組むようになる。②児童が地域社会と自分自身や自分の生活とのかかわりを強く意識したり、地域社会の持っているよさを学んでいく。③学校と家庭及び地域社会が一体となって児童の教育に取り組もうとする体制ができてくる。などがあげられる。

つまり、地域学習をする3年生にとって、ゲストティーチャなどの地域の人々とかかわることは活動的な学習を展開する上で必要なことである。

4 地域素材の教材化

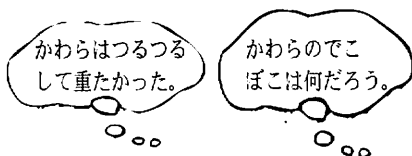
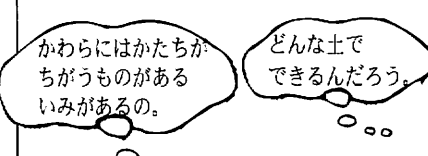
今回の学習指導要領改訂のポイントのひとつとして、地域社会についての学習が一層重視された。生活科との接続を図る観点から、地域の教材を活用し、具体的な体験の一層の充実を求めている。社会科の学習で地域教材の意義とは、学習の対象が身近であるということである。それらに親しみを持って接することができるというだけでなく、自分自身や自分の生活とのかかわりで考えたり調べたりすることができる。また、学習が学校や教室にとどまらず、地域に出向いて活動したり、体験したりすることができる。地域社会の社会的事象と接し、その意味を考えることにより、日頃何気なく見たり接したりしている地域社会のさまざまな人々や施設・関係機関などの働きを、自分の生活とのかかわりで考えるようになる。つまり、児童たちは自分の生活舞台における教材化された社会的事象との出会いを通して地域理解を深めるようになると共に、このような学習を通して児童は地域社会の一員としての自覚を持ち、地域社会に対して誇りを抱くようになる。

IV 授業実践

- 1 単元名 町の人たちの仕事とくらし ―かわらをつくる工場の仕事―
- 2 単元設定の理由 省略
- 3 単元の指導目標 省略
- 4 評価の目標

評価の観点	評価規準
社会的事象への関心・意欲・態度	与那原町で作られている「かわら」に関心をもち、問題を持って意欲的に調べたり、まとめようとしている。
社会的な思考・判断	かわら工場で働く人々の思いや願いについて考えることができる。
観察・資料活用の技能・表現	見学してきたことや、インタビューしてわかったことをまとめ、わかりやすく表現する。
社会的な事象についての知識・理解	かわら工場ではいろいろな工夫や努力のあることがわかる。

5 単元の指導計画 13時間

流れ	学習活動	教師の支援	評価
つかむ	1 ◎与那原町ではどんなものが生産されているか話し合う。 さとうきび ・きくの花 ひじき 与那原そば シーサーなど ◎その中で「かわら」、「与那原そば」、「黒砂糖」を取りあげ、どれが一番多く作られているか予想する。 ◎グラフから「かわら」が一番多く作られていることを知る。 ◎「かわら」にふれ、感じたことを発表する。 	○「かわら」「与那原そば」「黒さとう」の実物を入れたブラックボックスで授業への興味・関心を引くようにする。 (校区地図 実物) (ブラックボックス) ○与那原町で生産されているものの中から、「黒糖」・「与那原そば」・「かわら」を取りあげ、生産高や就業者数・工場数を棒グラフで比べさせ、「かわら」が多いことに気づかせる。 (棒グラフ) ○五感を使って「かわら」にふれさせ、関心を持たせる。 ◇ふり返しカード 	
	2 ◎学校や地域での「かわらさがし」の発表をし、身近なところに「かわら」が使われていることを話し合う。 ◎奥原さんの話を聞く。 ・首里城のかわらについて ・ソーテン瓦について ◎学習をふり返って感想を書く。 ・奥原さんの話や今日の学習の中から感想を書く。 ◎感想から学習問題をつかむ。	○「かわら」が住宅建材として昔から使われてきたことや、身近なところに使われていることに気づかせる。 ○ゲストティーチャーの話で興味・関心を持たせるように話題を工夫する。 ○調べたいことやふしぎに思ったことを書かせ、問題に結びつける。 ◇ふり返しカード	写真やグラフ・ゲストティーチャーの話から「かわら」に関心を持つことができる。 (関・意・態)

		かわら工場のひみつをさぐる 3 ◎前時の学習問題から、自分なりの予想を立て話し合う	○前時での調べたいことやふしぎに思ったことなどから、かわら工場のひみつには何があるのか予想させ、調べたいことを明らかにさせる。 ○資料「新聞の切り抜き」を提示して新たな疑問を見つけさせる。 ◇学習カード【1】	
し ら べ る	4 5 6 7	◎調べる計画をする。 問題ごとにグループを作る。 かわらの作り方 かわらの土 かわらの種類 かわらの利用 働く人 ・調べる方法やまとめ方を話し合う ◎工場見学の手配をする。 インタビューの仕方について 見てくると、聞いてくると 見学する工場 記録の取り方 ◎瓦工場を見学する。 かわらの作り方 かわらの種類 働く人の様子 働く人の工夫 困っていること かわらの良さなど	○学習問題ごとにグループ作りをさせ、グループ学習の計画を話し合わせる。 ◇学習カード【2】 ○ひとりひとりの疑問を大切にしながら発言を整理し、工場見学の具体的な視点を持たせる。 ◇学習カード【3】 取材マニュアル ○5つの工場へ7つのグループが分散して行けるようにする。 ○見学の視点に即して調べさせ、ものを生産するための工夫や努力に気づかせる。 - 工場への見学依頼 - 父母への協力依頼 ◇工場見学カード ◇ふり返りカード	「かわら」について関心を持ち進んで見学の計画を立てることができる。 (関・意・態) かわら工場ではいろいろな工夫や努力のあることを知る。 (知・理)
ま と め る 広 げ る	8 9 10 11 12 13	◎見学してきたことをグループで話し合いし、まとめる。 - 記録してきたことをもう一度確かめたりしながらまとめる。 ◎調べてきたことを自分たちのまとめ方でまとめる。 - 新聞・紙芝居・絵本・ペープサート・劇など ◎発表会をする。 - 一人一人の役割を決め協力して、発表する。 ◎これまでの学習をふり返ってまとめるをする。 - 学習問題についてみんなに広げかわら研究ノートにまとめる。	○記録をもとに話し合わせ、見学ノートにまとめさせる。 デジカメ・カメラ・テープレコーダー 報告文にしてまとめる(国語) ○グループごとにまとめ方や発表の仕方を工夫させる。 良さを発見して認め、つまづきがあれば支援する。 ○視覚に訴える発表の工夫をさせる。お互いの良さを認め合うように支援する。 ◇ふり返りカード ○写真やパンフレットなどを活用させる。 ○工場の人々の願いや思いについて話し合わせ、理解させる。	見学してきたことをわかりやすく表現できる。 (技・表) かわら工場働く人々の思いや願いについて考えることができる。

		◇ふり回りカード	(思・判)
	広げる<略>		

6 本時の指導計画

①単元名 ーかわらをつくる工場の仕事ー

②本時の指導目標

○「かわら」が建築資材として、身近かなところに使われていることに気づかせ、ゲストティーチャーの話を聞かせ興味・関心を持たせる。

③授業仮説

身近なところに「かわら」が使われていることに気づかせたり、ゲストティーチャーから「かわら」について話しを聞かせることによって、作る人への共感を持ち、「かわら」への興味・関心を持つであろう。

④展開

	学 習 活 動	教 師 の 支 援	資 料
つ か む (8分)	①前時の学習を想起し、学校内や地域での「かわらさがし」の答えを発表する。 校門前の掲示板 体育館の玄関の上 コミュニティーセンターの屋根 与那原町の案内図 等 ②博物館で見てきたビデオを想起し、昔の家について話し合う。 かわらの家 かやぶきの家	○学校内でかわらが使われている場所の写真を見せ、学校の建築資材として使われていること。自分たちの校区内にも「かわら」が使われていることに気づかせる。 ○校区地図にシールをはり「かわら」が多く使われていることに気づかせ、かわらさがしの意欲につなげる。 ○昔から「かわら」が家の屋根建材として使われていたことに気づかせる。	○H C 写真 (学校の掲示板) (体育館の玄関) (屋根) (案内図) 写真 (40年前の与那原小学校)
ふ か め る (30分)	③首里城などの写真を見て、「かわら」名人の奥原さんを知り、話を聞く。 首里城のかわらの数 首里城のかわらを作ったこと ソーテン瓦を考えたこと シーサーを作っていること ④奥原さんに質問をする。 ・かわらはどうやって作るのですか。 ・かわらのうらのでこぼこはどうしてあるのですか。 ・かわらの丸いかたがちがうのはどうしてですか。	(掲示板) (案内図) ○首里城は沖縄の特色ある建物であり、そのかわらを作った人が与那原町出身の奥原さんであることを紹介する。 ○首里城のかわらを作ったことなどやかわら作りについて子どもを引きつける話題で話してもらう。	(校区地図) パンフレット (首里城) 人材活用 奥原崇典さん (奥原製陶))
		 (授業風景)	

まとめ
(7分)

⑤奥原さんの話や、今日の学習から調べたいことやふしぎに思ったことを書き、発表する。

⑤次時の予告をする。

○今日の学習をふり返って感想を書かせる。

○書けない子には、考える視点をおさえ支援をする。

○発表をさせ、調べたいことやふしぎに思ったことを取りあげ、問題に結びつける。

○ふり返りカードに自己評価をさせる。

(発表の場面)

7 授業の考察

授業仮説【身近なところに「かわら」が使われていることに気づかせたり、ゲストティーチャーから「かわら」について話を聞かせることによって、作る人への共感を持ち、「かわら」への興味・関心を持つであろう】について、学校内での「かわら」は多く見つけたが、地域で「かわら」が使われているところは案外気がつかない児童が見られたので、身近なところで使われている「かわら」の写真やパンフレットをOHCで提示した。

本時では、ゲストティーチャーの話と児童の質問へ答えることで、「かわら」へ興味・関心を持たせ、「ふり返りカード」に調べたいこと、ふしぎに思ったことを書かせ、問題に結びつけた。
(児童の一人一人のつぶやき)

- ・かわらを作るときどんな道具を使っているのかな。
- ・かわらは何に使われているのかな。
- ・首里城のかわらについて
- ・かわらの作り方。
- ・かわらのおもさはどれくらいかな
- ・かわらのやき方。
- ・かわらはどこへ売っているのかな。
- ・かわらのしゅるいは
- ・どうしてかわらをつけるのかな。
- ・かわらのれきし
- ・おくはさんについて
- ・一けんの家のかわらは何日で作られるのかな。
- ・かわらを作ってみたい。
- ・かわらは日本にしかないのかな。
- ・工場は何軒あるのかな。

○今日の学習でがんばっていたと思う人や良かったところを書きましょう。

「かわらづくりめいじんがしゅりじゅのやねをつくれたのがいい。」

【表1】○かわらのことをしらべたいですか。

		とても	少し	ふつう	あまり
つかむ段階	第1時	39 %	39	22	0
	第2時	76	21	3	0
調べる段階		72	18	10	0
まとめる段階		62	20	12	6

「ふり返りカード」を見ると、すべての児童がゲストティーチャーや、その話の内容から調べたいことやふしぎに思ったことなど感想(上記児童の一人一人のつぶやき)を持つことができていた。「かわら」のことをとても調べたいと答えた児童が39%から76%と前時より大幅に増えたこと【表1】は、前時より「かわら」への興味・関心が増したことになる。今回はゲストティーチャーをはじめて活用したことで支援の仕方や授業の中でのかわり方にとまどいがあったが、作る人への共感や、「かわら」に興味・関心を持たせることができた。また、今回の授業ではじめて「ふり返りカード」を活用し、児童一人一人が問題をつかむことができたことや、どんな問題をつかんだかその状況を把握し、支援に役立たせることができた。

V 研究全体の考察

本学級の児童はこれまでも社会科の学習では、調べ学習や活動的な体験学習を楽しんで取り組んできた。今回の実践では、問題解決的な学習を取り入れ、今までの授業で弱かった問題をつかむ段階の指導に取り組み、児童が一人一人問題を持ち、調べたいこと、インタビューしたいことに意欲的に取り組んでいくような支援や活動の工夫をしていった。

○これまでの学習をふり返って感想（良かったこと、楽しかったこと）を書きましょう。

○ 資料提示

「つかむ」段階の授業の導入でブラックボックスを使い、その中に校区で生産されている黒砂糖・「与那原そば」「かわら」の実物を入れ提示した。次に、どれが一番多く作られているか予想させるための生産高・働く人の数を表した棒グラフを提示した。生活経験や消費生活と結びついている「黒さとう」や「与那原そば」と、その反対に児童の生活とかかわりの薄い「かわら」とを比べ

まさ子先生が、ブラックボックスをもってきたことがびっくりした。はこれの中に与那原でつくっているものをあてることがたのしかった。

させた。「かわら」が生産高・働く人の数でも一番多いと言うことは驚きであり「子どもの常識をひっくり返すもの」であった。また、「かわら」に直接触れさせたりしたので、五感で感じることができ、関心が芽生えた。実物が興味・関心を持たせるのに効果があることを実感できた。本実践では、写真・パンフレットも含めて視覚に訴える資料が中心だったが、工場の騒音や機械の音を利用した聴覚的な資料や見学を導入として扱うなど、児童が“あっとおどろく”ような資料提示も今後行ってみたい。

○ 地域人材の活用

本実践では、『学習に親しみを感じ、一層意欲的に取り組むようになる』ことをねらって「つかむ」段階で「かわら名人」を活用し、働く人への共感や興味・関心を高める工夫をした。「かわら名人」は生活科での「名人たんけん」の中から選び、奥原崇典さんに首里城のかわらを研究し作ったことやソーテンかわらを創作したことなど、その努力や工夫したことを話していただいた。ゲストティーチャーの話の後「かわらのことを調べたい。」と97パーセント（とても76%少し21%）の児童【表1】が肯定的に答えた。また、調べる段階では工場で働く人に直接インタビューしたので、「かわら名人」だけでなく働いている人たちも学習に活用できた。

○ 地域素材の教材化

本実践の「かわらを作る工場の仕事」は、児童の身近にある地域素材（かわら）を取り上げた教材である。「かわら工場」は児童の生活にかかわりは薄いですが、沖縄独特の赤がわらの屋根建材として沖縄で唯一生産されているという特徴がある。児童が自ら進んで調べ、観察し表現できる内容が含まれており、問



（インタビューの場面）

題の解決によって、地域社会に関心を持ち、地域社会の一員として関わっていこうとする態度が培われる教材である。そのため、素材である「かわら」と自分たちの生活との結びつきに気づかせ興味・関心を持たせた。「かわら工場」は校区の住宅地に6軒の工場があり、調べ学習に行かせやすいので、工場見学による調べ学習を取り入れた。今回の授業では五軒の工場へグループごとにわかれて見学させることができた。問題ごとの少人数のグループ活動になり、児童一人一人が、インタビューしたいことや調べたいことに取り組むことができた。児童は工場で働く人に直接にインタビューしたり、「かわら」が作られる様子を目の前

【表2】○今日の学習は楽しかったですか。

		とても	少し	ふつう	あまり
つかむ段階	第1時	88 %	3	9	0
	第2時	76	15	9	0
調べる段階	見学	94	6	0	0
まとめる段階	発表会	74	26	0	0

で見ることができたので、「もようがちがうのはどうしてかな。」と疑問を持ったり、「女の人が働いていると思わなかった。」と新たな発見をするようになった。このようなことから、見学後は94%の児童が「とても楽しかった。」【表2】と肯定的に答えた。見学を体験することによって「かわら」を作る様子は児童の好奇心を誘い、その後の授業でも「かわら」に興味・関心を持ち学習に取り組んだ。

○ 問題解決的な学習過程を終えて

感想（良かったこと・楽しかったこと）をまとめてみると、

見学したこと	・インタビューしたこと	・テープレコーダーの係りになったこと
発表会をしたこと	・ブラックボックス	・土をさわったこと
シーサーを見たこと	・カメラやデジカメで写したこと	・奥原さんのこと

となった。三年生の児童には見学、表現などの体験活動が楽しいということがあらためて確認できた。特に、発表会が楽しかったという感想が増えたことは友だちと関わりながら学ぶ楽しさを味わったと言うことである。また、調べ方としてカメラ・デジカメ・テープレコーダーなどの視聴覚機器とかかわったことも学ぶ楽しさとなった。

今回の単元を終えてのアンケートでは「かわらを作る仕事」の学習は「楽しかった。」と全員が答えている。また、ほとんどの児童が「最後までがんばった。」と答えている。このことから、やはり活動的な3年生にとっては、一人一人が問題を持ち、問題解決的な学習過程の中でインタビューや見学・表現などの体験活動を友だちや、地域の人たちとかかわりながら学習することが楽しく学ぶことだとあらためて確認できた。

○これまでの学習をふり返って感想（良かったこと、楽しかったこと）を書きましょう。

かわら工場に、行ってわたしのきき（ききに思ったこと）を工場でインタビューをしてそのききに思ったことがとけたので、やんきゅうにもなった。わたしは、かわら工場に行ったことがなかったのでもよかったです。あと楽しかったことは、見学です。働いている人のようすもわかったし、工場の人かどんなことをしているのかかわかったのでもよかった。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- 「つかむ」段階で資料提示やゲストティーチャーを活用したことで興味・関心を持たせることができた。
- 振り返りカードを活用することで、問題をつかませることができ、一人一人の学習状況の把握をすることができた。
- 調べる段階・まとめる段階でも楽しくグループ学習ができ、友だちの良さを見つけたり、認めたりできた。

2 今後の課題

- 問題解決的な学習の学び方を十分に身につけさせて、総合的な学習に生かす。
- 学習カードに書かれた学習問題と見学してきたこととのずれがある児童もおり、個々への支援の仕方を工夫する。
- 問題設定の場面でのグループの話し合い活動を充実させる。

<主な参考文献>

北 俊夫	『新学力観に立つ社会科－授業の理論と方法』	明治図書	1995年
筑波大学附属小学校	『社会科・楽しい授業の創造』	図書文化	1985年
朝倉隆太郎編	『新社会科指導法事典』	明治図書	1979年